

鎌倉海浜ホール～次世代の依代・箱舟を鎌倉由比ヶ浜に

R4.11.21

○今、この混沌とした世界でできること

- ・世界はこれまで創造と破壊、発展と収束のサイクルを循環をしてきた。
- ・これは、森羅万象全てが成長を求めるがゆえに起こるプロセスであり、成長への渴望がより大きなカオスを引き起こす。
- ・過去、同様のサイクルを経ながら、ゆっくりとではあるが人類は進歩してきた。
- ・世界と同様、個人が成長を願うとき、より多くの試練、ショックが与えられる。－（マイナス）を経験することで+（プラス）に転じることが出来る。
- ・今、インターネットやSNSによって世の中は狭くなった。情報が飛び交い、世界中の人々が様々な可能性について思いを馳せるようになった。
- ・世界が変革を強く望むようになり、その結果、様々な混乱が社会を襲うようになった。
- ・今後、自然災害、ウイルス、紛争、経済危機による社会不安が一層蔓延していくであろう。
- ・しかし、永久にではない。試練を乗り越え手にする未来を次世代に繋げていくことが今を生きる我々の務め。

○西洋音楽～発展の歴史と今

- ・王侯貴族や富豪などのパトロンが才能ある芸術家を庇護するという構図のなか、サロン的な場所で限られた聴衆で愉しむものとして西洋音楽のエッセンスは育まれてきた。
- ・興行的な利益をみこめるようになり会場は大型化、楽器の音量を求めるようになった
- ・その後、ジャズやロックの出現、ラジオの普及と録音技術の向上によって一気に広まった。
- ・宫廷音楽はクラシックというジャンルとして生き残るが、音楽は上流と大衆という二極化から多様化の道をたどった。
- ・そして、社会情勢と同様なことが音楽の世界においても進行している。
- ・誰もが自分の理想の音楽を、音楽家は表現の自由とよい環境を、聴衆はよりよい音楽を求めている。
- ・嗜好は多様化、細分化の一途をたどりつつも、本物を求める声と、単なる刺激、娯楽、ステータスの道具とする層との溝は深まるばかりである。
- ・いつの時代も本物はか弱い存在であり、競争原理の前では繊細な芸術はひとたまりもない。この混沌とした世界情勢において老人は口を閉ざし過去にしがみつくなか、このままでは若者たちは生き残ることに必死となり、本物の音楽は息絶えてしまう。
- ・災害という大洪水が去った後復興するために、音楽の種を守っていかなければならない。
- ・今、原点回帰による本物の芸術の庇護が必要である。有名プロから学生に至るまでの音楽の担い手達の依代となるセンターがあれば、そこが大洪水のさなかであっても嵐を潜り抜けることが出来るさながら箱舟のような存在となるのではないか。

○依代～音楽ホール建設への誘い

- ・原点回帰にふさわしい施設と環境、それは小規模ながら優れた音響とビジュアルを有する表現の場である音楽ホールを核とした文化施設を、東京都心にはない、しかしそこからさほど遠くなく、しかも豊かな自然環境と文化的な雰囲気を有する場所、はたしてそんな土地があるのだろうか・・・
 - ・鎌倉幕府の象徴として建立された鶴岡八幡宮をはじめ、旧市内の重要施設はすべて相模湾-由比ヶ浜を背景とし配置されている。この由比ヶ浜海岸にほど近い場所に約 1.7ha の「その土地」はあった。
 - ・明治期に入り、由比ヶ浜がサナトリウムに格好の地であるとし、その土地に「海浜保養院」が設立された。また日本初の「海水浴場」となり、療養の適地としてその名が広まった。
 - ・この海浜保養院はジョサイア・コンドルによる設計で、大改築、改造が施されその名を「鎌倉海浜院ホテル」として全面的にリニューアルされた。
 - ・その後、「鎌倉海浜ホテル」と名を改め、滞在者も来訪者も、松籜の中で、ここでの滞在を心ゆくまで味わっていたという。サービスの質も、またサロンとしての雰囲気も、このホテルは往時の日本の近代化のシンボルとして輝いていた。
 - ・関東大震災で被災するも、高台にあったこの地は津波の被害を受けず、また太平洋戦争での被災をも免れたが、敗戦後、米軍に接収された直後に惜しくも不審火により全焼してしまう。以後、ホテルは再建されず、その土地は今日に至るまで更地のまま佇んでいる。
 - ・由比ヶ浜のこの土地に音の殿堂を創るべき、と言う提案を致したのは、ハード面においては、鎌倉の中心部で重要な要素として古より神聖視されていたと思しきこの地域に於いて、17,200 m²というフラットな底地はもう今後 2 度と出現しないこと、近接して市立の公園があり、また四季折々、雄大で美しい海の景観を眺望できること、そして、このような稀有な土地が奇跡的に今現在まで残っていること。
- ソフト面では、伝統的な文化と近代、現代の要素が混ざり合った独特の文化圏を形成している環境に魅了された、プロアマを問わず優れた芸術家が多数居住しており、もし集うべき主軸、依代が出現した場合、それらは束ねられ新たな素晴らしい芸術が生み出される可能性があること。

もし、素晴らしいホールがあれば、優れた芸術家が集い、そこから数多くの素晴らしい芸術が生まれ、さらに多くの芸術家が吸い寄せられ、そして質の高い芸術を求めてたくさん的人が集まる…、そして反対のベクトルを持つ集団は自ずと彼の地から遠ざかるであろう。そして、その素晴らしいホールが素晴らしい場所にあったなら…、想像するだけでもわくわくしないだろうか。

由比ヶ浜の名前の由来は、多くのものを束ねる～「結」からきているという説がある。優れた才能と資質を魅了し束ねる「結（ゆい）」、それを由比ヶ浜のこの土地にぜひ。

○海辺の森に佇む「音楽ホール」の建設

古よりの歴史と文化の源として、その栄華を支えてきた由比ヶ浜、この土地にふさわしい「古の時代を彷彿とさせ、かつ現代的なニーズに合致した計画の実現」を強く願う。次にその具体案を提起してみたい。

(1) 白砂青松～黒松林の復活

由比ヶ浜にかつて存在していた黒松を、防砂としても修景としても役立てるために、この土地の四囲に、鎌倉のシンボルツリーであった黒松を植栽する。

(2) 駐車場は不要

由比ヶ浜地区は、鎌倉駅からおよそ 1.3 キロ、15 分程度の徒步圏であり、鎌倉ないし藤沢方面から江ノ電を利用すれば、和田塚駅乃至由比ヶ浜駅から当地までは僅か徒步数分でアクセスでき、利用者はいずれの鉄道駅からも徒步圏にあると言って良い。

隣接地である鎌倉海浜公園の地下には国道 134 号地下駐車場を始め、周辺に複数の民間の駐車場があり、総計 300 台を超える駐車場がすでに備わっていると言っても良い。

(3) 意匠形態

このホールの目指す建築性は、鉄筋コンクリートではなく、ウッドディなデザイン性溢れるものを目指し、我が国の誇る木材を基幹素材として使用したい。構造上必要な鉄筋鉄骨は、最小限度に留め、修景上、その形状を顕わにすることは避けたい。

(3) 規模

本案に於けるホールの客席規模は、敷地面積 17,200 m² と隣接する環境を意識するならば、およそ 300～400 席程度の、いわゆる小中規模のホールがふさわしいと考える。周辺は静謐な住宅街であり、特に用地の東側と西北側は住宅街が近接している。南側は市が管理する前述の公園であり、北側の一部は旧海岸通りに接している(図参照)。

ホールはあくまでも演奏会主体ではあるが、映写を可能にする大型(マルチ)スクリーンを付設し、また音楽以外のイベント、例えば入学式や卒業式、シンポジウム、各種セレモニーなどへも開放するものとしたい。ホールを構成する要素を以下に挙げておきたい。

- ・およそ 300 席の客席とフルオーケストラの演奏可能なステージ
- ・ギャラリー、多目的室
- ・チケットオフィス、事務室
- ・ロビー、ホワイエ
- ・レストラン・カフェ(コンサートなどが開催されない日、時間帯には一般に開放。基本的には専門業者への委託。前庭にもオープンカフェを設定)
- ・食材供給可能なオーガニック野菜等を栽培するエリア・ビニールハウス
- ・練習・録音スタジオ、映写室、工房室
- ・管理室、スクリーン
- ・附帯宿泊機能を有する建物(15～20 室程度。シングルルーム主体で出演者・関係者優先)

H.K.